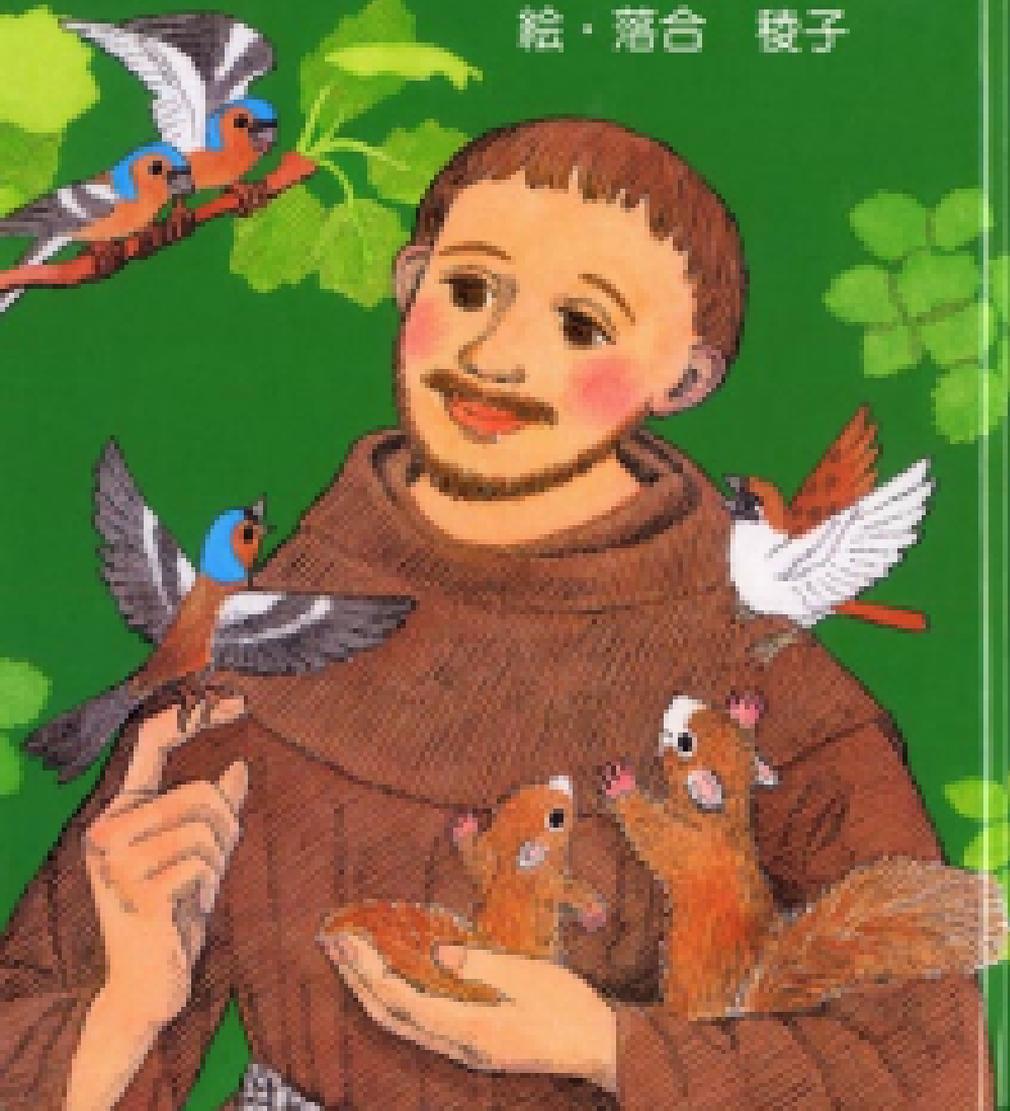


みんなのきょうだい

# フランシスコ

文・戸田三千雄  
絵・落合 稜子



みんなのきょうだい

# フランススコ

文・戸田三千雄

絵・落合 綾子



女子バウロ會

1957年10月1日  
 10月1日  
 10月1日



もくじ

1 父親の家で

小さい友だちのみなさんへ

お母さんとお前り	14
おとろき遊び	17
早稲子らの冒険	20
いちばんになるお人	25
人気歌手	27
生まれたときのこと	30
父のお店	33
鴨子	38
病児	42





けんさんなん 189

ダレツオのうまや 202

5 キリストのようすに

五つのきすあと 210

苦しみのささげしの 214

兄弟夫婦の歌 220

祝福とお別れ 225

さいこのお客さま 231

おしまいに 237



4 小さい友だちのみなさんへ

この人間の住んでいる地球でしあわせと思ふことは、いろいろあります。でも、友だちのできることは、それも知りあつてほんとうにまかつたといえるような友だちのできることは、最高のしあわせです。

あの友だちのおかげで、今のわたしのしあわせがあるんだ、といえるような人と出会つて、いつまでも親しくできたらすばらしいことではありませんか。尊敬する友だち、親友とよべるなかましの友だちのいる人は、しあわせな人です。

ところで、わたしにもそういう友だちがいるのです。そのわたしの心の友だちを、ぜひきみにもしようかいいたいと思ひます。この友だちは、わたしもしようかいいされて知りあつたのです。それで、このしようかいいしてくれた友だち

は今だつてわたしは感謝しています。おすれてなんかないません、だから同じようにわたしも、この友だちをきみにしようかいいたいのです。そうすればわたしのことも、思い出してくださるでしょうから。

友だちの名はフランシスコといいます。友だちというより、兄弟といったほうがいくらいです。もちろんフランシスコは、わたしよりずっと年上です。しかし、大きい兄さんというよりも、小さい兄さんといったほうがぴったりといった人です。

フランシスコはやせっぽちで、身長もメートル五十八センチくらいでしたから、ほんとうに小さい兄さんです。顔はたまご型で、いつもうれしそうにしています。目は黒くすんでいて、見つめられるとほずかしいような、でもうれしい気持ちになります。フランシスコと知りあった人はだれでも、おじいさんも若い人も、男も女も、そしてとくに子どもたちが好きになりました。話ししてみると、すぐに自分のことをたいせつにしてくれる人だ、ということがい

ーんと感じられて、むかしからの友だちのようになるのでした。

またフランシスコはふしぎな声を持っていました。大声をはりあげてけんかをしているときは、フランシスコの声を聞くとはずかしくなるほど、フランシスコの声にはふしぎな力がありました。ことばはただの音でもしるしてもありません。ことばはまごころだったので、心の中で思ったことと、口から出てきたこととはひとつになっていました。心になんかこたえないことは、ことばにならなかつたのです。

どんな人に似ているかというと、フランシスコを知っている人はたいいてい、イエス・キリストとまじりに似ているといえます。フランシスコの語ったこと、したこと、生活を見ていると、イエスをまを思い出すのです。世界中の人が、むかしも今も、キリストに似ているといっているのですから、フランシスコもこのほまれをよらこんでいることでしょう。でもフランシスコは生きています。あいだ、自分で一度もそんなことは考えていなかったと思います。

日本人の中には、映画（新聞紙）の女優さんに対しているという人もいます。そのように見えると思います。貞蔵さんはおぼろさんで、まずしいくらしをしました。フランシスコもおぼろさんで、一生のあいだ貧乏暮らしをして、さいごにはほかのまま地べたの上でなくなったとはとてました。イエスさまがそうだったので、フランシスコも同じようにしたのです。そして、フランシスコのたましいは、歌をうたいながら、明るく、うれしそうに天の父のもとへ帰っていきました。

それは今から八百五十年のことです。フランシスコは、イタリアのアシジで一一八一年に生まれ、一二二六年十月三日にアシジの町の外にある小さな教会の庭でなくなりましたから、四十五歳の短い一生でした。

遠いむかしの人のことと思うでしょう、それがちがうのです。フランシスコのことをしるうかいされた人はみんな「わたしもそうなのですが」、どこかではつたり会えるような気がするのです。全世界には、フランシスコのおもかげを待った人もいますから、そういうフランシスコの兄弟に出会った人も多いでしょう。

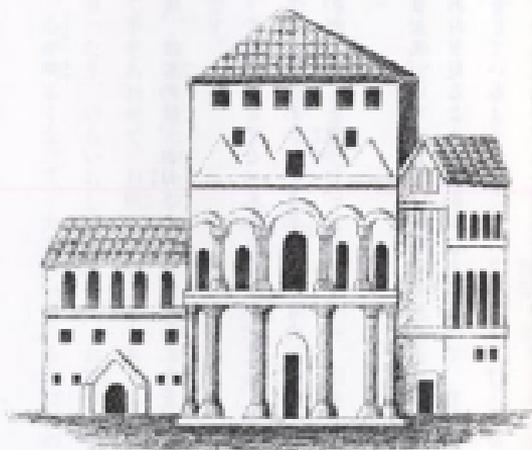
たぐさんの人が、今まではフランシスコの一生についてりっぱな本を書きました。わたしにはそのような本が書けるとは思っていませんでしたが、まったく思いがけず、小さい友だちにしうかいするとうい、うれしい役目をたのまれました。それでできるかどうが事実にもとづいて書くようにしましたが、よくわからないところは、わたしの見た目で、想像で書きました。とにかくこれは、わたしの友だちフランシスコの物語なのです。少しでも小さい兄さんのことを知ってほしいと願って書いたしうかいなのです。

フランシスコはいつも大きい兄さんのキリストのあとを追っていました。それで小さい兄さんのうしろすがたを見て、そのあとについていくと、いつか小さい友だちのみなさんも、大きい兄さんに出会ってしう、そして、みなさん

がイエス・キリストさまに似ているといわれるようになるかも知れません。キ  
リしたらマラシンスコも、わたしも心からうれいのです。この本をおして、  
わたがいに知りあえたことを、感謝してあります。

（以下、非常に薄い文字で印刷された、ほとんど読み取れない縦書きの文字が複数行にわたって続きます。）

# I 父母の家で



鬼 お母さんとお祈り

フランシスコはお祈りをします。はじめは、お母さんのしていることを見て、学びました。

ある日、まだフランシスコぼうやが小さくてなにも知らなかったころ、お母さんのじやう夫人が、手をあわせてじっとすわっているのを見ました。ぼうやは、「お母さんは、なにをしているのだろう。」と訊いて、

「お母さん、なにをしているの。」

と聞きました。がへんじがありません。ふしぎに感づいて母の顔のぞきこんでみると、じやう夫人は、なにかをまおぎ見るように顔を少し上に向けて、でも目はとじたままで、だれかとお話をしているようでした。フランシスコぼうやが母の見ているほうに目をやると、そこには子どもをだいた母の顔がかべにか

かっています。ひとみをかがやかせている小さい子どもと、やさしくははえんでいる母の顔がこちらを見ています。

そのときじやう夫人は、

「あのかたはイエスキリストとお母さんのマリアさまよ、フランシスコもお祈りをしてごらんなさい。」

「よいました。そこではうやもお母さんと同じように手をあわせ、目をかくくとして、となりにすわりました。すると、なんだか心かしくなつて、あたたかくなるのがわかりました。こうしてフランシスコは、お母さんのうしろすがたを見てお祈りを学んだのです。」

それからフランシスコぼうやは、お祈りをたびたびするようになりました。ときには母と子とふたりならんで手をあわせて、お祈りすることもありました。「お祈りってふしぎだなあ。あせったり、いらいらしていたのに、お祈りするとおどやかな気持ちになれるし、心が暖かくなつて、おもわいてくるんだもの。」